

マレーシア

景気は春以降持ち直しへ

SMBC Asia Monthly

日本総合研究所 調査部

副主任研究員 塚田 雄太

E-mail: tsukada.yuta@jri.co.jp

■2018年末から生産が減速

2018年末からマレーシア景気が弱含んでいる。とりわけ、製造業活動の低迷が鮮明になってきた。製造業生産は、2017年秋口をピークに増勢が大幅鈍化していたが、2018年末に一段とペースダウンし、2019年1月には2年4ヵ月ぶりの低い伸びとなった(右上図)。品目別にみると、食用パーム油生産が減少したほか、電機・電子部品生産の増勢が大きく鈍化した。

この背景として、輸出の低迷を指摘できる。まず、食用パーム油では、中国等の景気悪化を主因に、輸出需要が減少した。この結果、パーム油在庫が2018年12月に過去最高水準まで積み上がったほか、スポット価格も2018年下半年に約2割下落している。一方、電機・電子部品生産も、世界的なスマートフォン販売の不振や仮想通貨の採掘用パソコン需要が一服したこと等が影響した。

マレーシアの実質GDPに占める輸出は約70%と高いこと、さらに、パーム油と電機・電子部品が輸出の約4割を占めることから、両製品輸出の低迷によって足元の実質成長率は+4%台前半まで落ち込んでいるとみられる。

■インフレ率が10年ぶりのマイナス圏内に

もっとも、2019年春以降、マレーシア景気は再び持ち直すと予想される。

外需は、中国経済が政府の機動的な景気刺激策の効果で持ち直すと予想されるため、対中輸出が再び回復するとみられる。

また、内需も、インフレ率の低下や低所得者向け補助金支給で、消費者の購買力が高まるため、民間消費の増勢が持ち直すと見込まれる。実際、マレーシアの消費者物価は2019年1月に前年同月比▲0.7%と10年ぶりに下落した(右下図)。これは、マハティール新政権が国内燃料価格の決定方式を改め、価格上昇を抑制しているためである。同政権は今後も燃料価格を低く抑える意向を示しているため、当面はインフレ率の前年割れが続く可能性が高い。さらに、2019年後半には、低所得者向け補助金の増額を予定している。

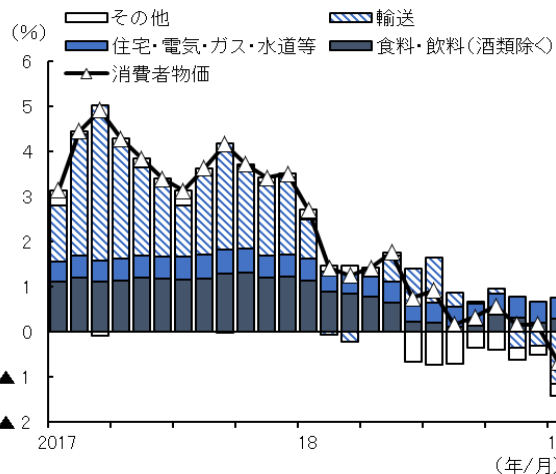
以上を踏まえれば、マレーシア経済の大幅な景気悪化は回避され、2019年春以降成長率は+4%台後半に復帰していくと予想される。

＜マレーシアの製造業生産と輸出数量＞
(後方3ヵ月移動平均)



(出所)マレーシア統計局、CEICを基に日本総研作成

＜消費者物価指数(前年同月比)の推移＞



(出所)マレーシア統計局を基に日本総研作成